

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.27 No.6 June 2026

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University



6

CONTENTS

・巻頭言

「元初まりの話」の読まれ方・その3
／井上 昭洋 1

・文脈で読む「身上さとし」(25)

明治 23 年 6 月～8 月
／深谷 耕治 2

・英語文献にみる天理教 (16)

『Japan To-Day (現時の日本)』(3)
／尾上 貴行 3

・音のちから—中国古代の人と音楽 (32) 逸話を通して見る音の世界—曲芸の勝負—

／中 純子 4

・ブラジルの宗教的風景 (13)

アンテペラム期の米国系プロテスタント教会による布教活動⑦
／中西 光一 5

・図書紹介 (137)

金子 昭著『近代日本国家と天理教の時局対応』
／金子 昭 6

・おやさと研究所ニュース 7

2025 年度おやさと研究所 特別講座「教学と現代」「元の理」の学際的研究の可能性」を開催／第 386 回研究報告会 (4 月 29 日) / 2026 年度公開教学講座のご案内

巻頭言

「元初まりの話」の読まれ方・その3

おやさと研究所長 井上昭洋 Akihiro Inoue

比較神話学の視点から「元初まりの話」を読み解いたものとして大林太良の論考がある。およそいかなる創世神話も、何も無いところから突然出現するものではない。その地域に根づく民間伝承や説話が下地となり、そこから新たな物語が作り上げられていく。こうした視点に立って「元初まりの話」を分析する際に、大林が参照軸に据えるのが『天地始之事』という書物である。それは潜伏キリシタンの聖典であり、江戸時代後期に長崎外海地方や五島列島で伝承・記録されたと考えられている。「創世記」に由来するとみられる内容に、その地域の伝承や民間信仰が混入して形成された、独自の創世神話と言える。

『天地始之事』の中から大林が取り上げるのは、兄妹婚の物語である。大林によれば、兄と妹が結婚し人間の祖先となる神話は、東南アジアから中国南部、沖縄にかけて広く分布している。これは、この世の初めに大洪水で兄と妹だけが生き残り、人類の祖先になるという洪水神話の一類型である。しかし『天地始之事』では、洪水と兄妹の近親婚の順序が逆転しており、兄妹が結婚したがゆえに大洪水が起こったことになっている。土着の伝承(兄妹婚タイプの洪水神話)を母体としつつ、洪水と近親婚の順序を逆転させることでキリスト教的な罪の観念を織り込んだ、新たな創世神話が誕生したと彼は論じるのである。

『天地始之事』に向けた分析視点を「元初まりの話」にも適用して読み解く際に、大林がまず注目するのは、大和地方に伝わる「元初(1)の世界は泥海であった」とする伝承である。(2)「元初まりの話」の冒頭も泥海から始まっており、彼はこの地域の伝承が物語の下地となっていることを見て取る。その上で、大林が「元初まりの話」の独自性として最初に挙げるのは、人間の起源を正面から描いている点である。記紀神話が人間の創造を主題としないのに対し、「元初まりの話」はそれを物語の

中心に据えている。大林はここに、民間の創世神話としての「おもしろさ」を認めている。

世界各地の創世神話には材料を用いて人間を創造するモチーフがあり、泥や粘土(肉のメタファー)、木や石(骨のメタファー)などが用いられることが多い。しかし「元初まりの話」では水棲動物が創造の材料となっており、大林はここにも「おもしろさ」を見出す。沖縄には兄妹婚からシャコ貝や魚、ヤドカリが生まれ、次いで人間が誕生するという神話が複数の島に伝わり、台湾にも洪水を生き延びた兄妹からヘビ・カエル・人間が順に生まれるという神話がある。大林はこうした事例から、「元初まりの話」における水棲動物の重要性が、日本列島から沖縄・台湾にかけての地域の伝統を受け継いでいる可能性を指摘する。

最後に大林は、混沌の泥海から秩序への移行が、人間の成長と水陸の分離という二軸に沿ってなされている点に注目する。多くの神話では天地の分離によって秩序もたらされるのに対し、「元初まりの話」では水陸の分離が重要な意味を持っており、それに対応して水棲動物が重要視されているという。彼は「元初まりの話」を構成するモチーフを大和の民間信仰に位置づけつつも、同じ形の話が見つからず、内陸部の神話でありながら海の魚が重視される点についてどう考えればよいか分からないと正直に吐露する。大林にとって「元初まりの話」は、「おもしろい」が、なお「分からない」点を残す創世神話なのである。

[註]

(1) 大林太良(1987)「比較神話学からみた『元の理』について」『G-TEN』第19号、93～106頁。(『講座「元の理」の世界1:「元の理」の人間学」に再録)

(2) 天理市三島町はかつて泥海に浮かぶ三つの島であったと記す高田十郎(1933)の『大和の伝説』を、大林は紹介している。

増野正兵衛一家は、明治23年1月からおぢばに伏せ込むようになり、2月には長男の道興が誕生した。その年の6月から8月の「おさしづ」を見ていく。

- ・明治23年6月9日：増野正兵衛小人道興目かいの障りに付願
- ・6月18日：増野道興夜泣き、又昼も機嫌悪しくに付伺
- ・7月2日：増野道興二三日前より目が塞ぎ居るに付願
- ・7月9日：長門国阿武郡萩御許町五十五番屋敷居住の増野正兵衛母ふさ病気に付、帰国致します事御許し下されますや、又は書面にて御話申越す方宜しきや伺
- ・7月18日：増野いと居所の障り願
- ・8月4日：増野正兵衛朝をびやつとめを済ませてから、身が何となくしんどくなりし故、宅で休み、暫くして起きたるが腹が下り、その後速やかおたすけを頂きしも、案じの事も無きやと、いろへ思案すれども、分かり兼ねるに付伺／同時、増野いと的身上に付、これまで不自由々々々はこのうの理とも、いろへ理を論し頂き、その通り伝えたなれど、とかく間違うた事ばかり申しますが、これは家内の心に委せ、思うようにさせた方が宜しう御座りますや願
- ・8月12日：増野正兵衛足裏痛みに付願（増野正兵衛一昨日飾東支教会出願、神様の御守護を以て御許しを得、帰って後首筋引き付け、昨日も同様、今朝起きて足の小指怪我致し、その後何となく右の足の裏踏み立つと痛みあり、いかなる事でありますや）
- ・8月22日：増野正兵衛歯障り小人道興機嫌悪しくに付伺
- ・8月26日：増野正兵衛の実母山口県長門国阿武郡萩御許町五十五番地にありて、急病なる由電信を以て申越せしが、存命なるや、身上は叶わんものであるや願／又、思案中にお聞かせ下され／又、押して、存命で居られませぬのでありますや伺／又、お話あり／又、お話あり

明治23年6月9日、増野正兵衛の長男・道興(生後4ヵ月)の「目かいの障り」に付いて願うと、「どういふ事、こゝういふ事、日々の心である」や「成る成らん事情、心にあつてならん」と身上の現れと心の在り方について論されつつ、「どれだけの事情、出産前生一つの心という。今一時新しい事情は無きもの」と産まれる以前の「前生の心」についてふれられて「案じるものでない」と説かれている。

それから9日後の18日、またも道興の「夜泣き、又昼も機嫌悪しく」に付いて伺うと、「前々論し置いたる。案じる」と、前に論じたことが承知できないまま先案じの心でいることを指摘されたうえで、「心にどんと定めてみよ。心いらって〔焦って〕どういふ事であろう」と論されている。この前後に、本席自身の身上(腹の差し込み、左の歯の痛み)を通じて、「尽しながら残念な事やなあ、こんな事かい、と言う。この理が日々腹へ入り込む差し込む(6月17日)と論されているように、お屋敷では「尽くしながらも、不足が出てしまう」という状況があったのかもしれない。道興のこの「おさしづ」も、そのような前後の文脈の中にあるように思われる。さらに、7月2日、道興に関して「二三日前より目が塞ぎ居る」に付いて願うと、「親が難儀不自由さそう親はあろうまい」と述べて、繰り返し「案じる事は要らん」と説かれている。

9日に、正兵衛の母ふさが「病氣」になったので、神戸に戻っていか手紙を書くべきか伺うと、どちらとは述べられずに「さあへ間を見合わせて一度、順序安心はさせるがよい」とタイミングを見計らって理を論すようにと伝えられている。

18日、妻いと「居所の障り」について願うと、「一日の日はどれだけ案じて、一日の日は経つもの、どんな日も一日経つもの」と、案じて案じなくても一日は過ぎるのだから、同じ一日を過ごすなら案じ心のない日々を送るようにと諭されている。

8月4日、正兵衛が「をびやつとめ」の後「身が何となくしんどくなり」しばらくして「腹が下り」、「その後速やかおたすけを頂きし」もその身上について思案したが「分かり兼ねるに付」伺うと、「これからどんな事情に掛かるやら知れん」と、これから「道を変える」ことに関して、事前に「案じる事は無い」と諭されている。

また、同時に、妻いとにこれまでの理の論しを「その通り伝えた」が、「とかく間違うた事ばかり」言うので、「これは家内の心に委せ、思うようにさせた方が宜しう御座りますや」と願うと「一つの理を楽しませ。住家狭く、いついつの理でない。順序一つ楽しませ」と、今は住む家が狭くとも、やがては結構になるという楽しみの順序を伝えることを説かれていると拝察される。

12日、正兵衛が「足裏痛みに付」願うと「身上の事情、今日はなあどんな談示どういふ事、論し難しい、難しいようで、仮名なもので分かりよいもの。心の事情理が分かり難い」と本来は分かりやすい論しでも、受け取る心で分かり難いものになることが論されている。

22日、正兵衛の「歯障り」と道興の「機嫌悪しく」に付いて合わせて伺うと、「今一時世界どんな所、善い事悪い事も洗い切る」と世界の事情についてふれられつつ、「この道危なき道は無い」と案じることのないよう諭されている。

26日、母ふさの急病について「存命なるや、身上は叶わんものであるや」と願ひ、さらに押して伺うと「一度戻る順序の道、内々案じの心、順序理を以て治めやるがよい」と順序の理について説かれ、さらに「心は大丈夫に持って居るがよい」と諭されている。○腹(腹下り)

『身上さとし』では8月4日の「おさしづ」について「身上が悪くても、どういふ事こゝういふ事と心配するに及ばない。万事情を大層速やかにあらためよ。何をするにも最初は大変だが、段々はじめて行けば治まるようになる。という意味で、腹下りは、速やかに定めた事を運べということを示されたのである⁽¹⁾」と述べられている。

「おさしづ」の後半部分に着目すると、これから何かが変わっていくことを、事前に身上で知らせているとも読み取れるだろう。当時、正兵衛の周辺では、妻いと、長男の道興の身上が続き、とくに母ふさは重態であったことがうかがわれる。しかし、そのような個別の身上に対する論しであっても、そこには同時に世界の事情とも関わるメッセージが込められているのではないだろうか。悟る側が、どの視点に立つかで、「おさしづ」の受け取り方も変わってくる。

※本連載は執筆者の都合により今号で一時中断します。

[註]

(1) 深谷忠政『教理研究身上さとし—おさしづを中心として』天理教道友社、1962年、180頁。

前回(4月号)まで望月小太郎著『Japan To-day(現時の日本)』(1910年)についてその装丁や概要を見てきたが、今回からこの書物の天理教に関する記述を見ていくことにする。天理教は、第4章の「寺院と神社」のなかで神道の一派として紹介されている。「寺院と神社」は全部で17頁あり、そのなかで高野山金剛峰寺や江ノ島神社など合計10の宗派や教派が紹介されているが、天理教の説明は3頁にわたり、ほかと比べて詳細に紹介されていると言える。

望月はまず宇宙の起源、自然現象の摂理、そして人間の運命について言及し、優れた哲学者たちの深い洞察や古代から書き記されてきた書物などによって、これまで我々人間がどこまで真にこれらの事柄を理解できたのだろうかと問いかけている。そして、懐疑論者にはあらゆるものが不可知に見えるかもしれないが、信仰の目を開き、敬意と敬虔な態度をもって天と地を観察することで、その広大さと無限性に驚かされるのであり、そのような認識において天国は意義深いものとなり、人間世界は意味に満ち溢れたものとなると続ける。

そして望月は、キリスト、孔子、ブッダ、ソクラテスの名前を挙げ、こういった悟りを開いた人々は、その言動をもって人間の生き方を説明することで、人々の無知の魂を啓発し、人類と世界の救済を目指してきたのだとして次のように述べている。彼らは、人間でありながらも神でもあり、人類が歩むべき道を示すためにこの世に生まれたのである。懐疑的な不安、学問的推論、道理に合わない詭弁を持たず、宇宙の神秘の深淵に飛び込み、偉大な真理に関する先見の概念を享受し、無数の魂を正しい道へと導くことが出来る人々である。世の中の人々は彼らの話に耳を傾けることで、心を入れ替え、行いを改めるのであり、心の安寧と自らの運命への悟りを得ることが出来るのである。これら悟りを開いた者たちは、神、ブッダ、聖人、賢者などと呼ばれ、人々から大いなる尊敬を集めている。そして望月は、このように世界には神の啓示や長年の思索によって新たな教えを創始する人々がいるのであり、天理教の教祖もその一人である、と述べる。

望月はまず天理教について、その最大の特徴はその教義にあるのではなく、忠誠心、従順な心、信仰心などの涵養、そして信心深さと愛国心という美德にあるのだ、と述べる。そして、その主張を裏付けるものとして次のようなエピソードを紹介している。1887年(明治20)の夏の終わり、大阪のある著名な小説家が美濃国恵那(現在の岐阜県恵那市)を訪れていた。道中には越えなければならない多くの山谷があった。灼熱の太陽のもと険しい道を歩き続け、たくさんの本が詰まったかばんが肩に重くのしかかっていた。このような旅に不慣れな小説家は疲れ果て、道端にへたり込んでしまった。ちょうどその時、40歳ぐらいの穏やかで物静かな風貌の農夫が通りかかり、彼のかばんを持つことを申し出た。彼は大変喜び、農夫の後についていくことになったが、その姿はまるで天の光明に包まれているように見えたのである。小説家はこの農夫と別れる際に、御礼として20銭銀貨を渡そうとしたが、その農夫は受け取ろうとせず、「私は天理教の信者であり、神のためにあなたに奉仕し

たのですから、あなたの申し出は受け入れられませんし、受け入れる理由も見つかりません」と言ったのである。望月は、このエピソードを紹介したのち、この天理教信者は単なる無知な農夫に過ぎなかったが、彼は天理教の教えを聞き、利他的で自己犠牲的、そして同情心のある人間になったのであり、この一例はいかに天理教がその教えの実践を重視しているかを示している、と説明しているのである。

続いて、望月は天理教の教義について説明していくが、まず人間の魂について言及している。天理教によれば、人間の魂は神から授かったもので、それは無限で、不滅で、その営みには終わりが無い。そして魂が磨かれ、洗練され、いかなる異物も混じっていないほど純粋になると、人は神と接することができ、神の意志と結びつくことができる。この悟りの境地に達した者は、今度は喜んでその言動により他者をこの教えに導くようになるのであるとしている。

次に、望月は教祖について述べる。天理教の教祖は幼いころから非常に敬虔で信心深く、自然の神秘に深く入り込んで、天理の教えの受容者となった。神が彼女に神とこの世の真理を啓示し、この啓示によって彼女は数十年にわたり布教活動を推進することとなり、やがてこの宗教団体が設立されたのである。天理教の信者は、教祖の戒律は天の道にかなう神聖なものであり、人々に心の安寧と生きる目的を与えるものであると信じている。そのため、彼らはこの宗教の教義を遵守し、その恩寵に感謝を捧げているのである。そして望月は、天理教の教えによれば、人間は神の恩寵によってこの世に存在しているのであり、人間の身体、この世界、そしてありとあらゆるものは神に属するものであると続ける。人間は、神の恩寵によって、これらを借り受けているにすぎない。しかし、人間はこの偉大でありかつ明白な事実気づくことができず、すべては自分たちのものであるという誤った考えで生きてきたのである。利己的な動機と欲情によって引き起こされるすべての盲目的な争いはこの知識の欠如の結果であると天理教は教えている、と説明している。

さらに望月は、天理教の説く天の法則について次のように説明する。神の所有物であり、人間が神から借りているこの世界は、道徳的な目的のもと神によって統治されている。この神の世界には、偶然に生じてくる出来事は一つもない。蒔かれた種は必ず生えるのである。貧しい人、裕福な人、賢い人、愚かな人、高貴な人、卑しい人、健康な人、病気の人、皆それぞれに原因がある。病気や貧困のなかで自らの運命を嘆き悲しむ人は、この世の道理を知らず、それに基づいて生きていないのである。天の法則を理解し、それに従えば、病人や貧しい人でも自分の運命について嘆き悲しむことはない。すべては神の恵みによるのである。そしてこの神の恵みに浴するためには、神の意志に基づき、奉仕しなければならない。これが天理教の教える「ひのきしん」である。これは神への無償の奉仕である。天理教の信者たちは、この「ひのきしん」の生き方を目指し、その実践に努力している。この境地に達すると、知識や身分、貧富は問題ではなくなり、神の意志に近づいて、皆が平等に祝福を受けることが出来るのである。

逸話を通して見る音の世界—曲芸の勝負—

唐代の皇帝として有名な玄宗にまつわる逸話は少なくない。なかでも楊貴妃との悲恋はよく知られている。今回は玄宗と音楽との関わりを語る逸話を取り上げてみたい。まず、前提として確認しておきたいことがある。宮廷音楽を掌る役所として「太常寺」と称する機関があり、これは秦代の「奉常」に始まり、漢代に「太常」というようになったもので、「寺」とは役所のことを指す。ここでは雅楽を扱う。一方、宴饗音楽や曲芸を受け持ったのが玄宗期から登場する「教坊」である。ここでいう曲芸とは「雜技」「散楽」と表現されるものを指す。

『教坊記』という書物

唐代音楽を文献によって研究するうえで重要になるのが、崔令欽による『教坊記』である。崔令欽の詳しい事蹟はわからないが、その序文から、教坊に勤務する武官に俸給を手渡す役職にあった崔が、開元期(713～741)に聞いたことを、玄宗崩御(760)後ほどなく記したことは確かである(齋藤茂『教坊記・北里志』東洋文庫、1992年、14頁)。それは、教坊に勤務する12、3名の武官からの聞き書きにもとづくもので、体系的ではない。しかし教坊の位置や坊内の伎人の種類、演じられた歌舞・散楽の種類や様子、坊内の妓女の風習、噂話など多岐にわたってそのありようを伝えてくれる(同上、22頁)。なかでも重要なのが、開元当時の教坊で披露された343曲の楽曲名である。そこには次の宋代の詞余の曲名として使われるものも多く、また我が国の雅楽に関連する曲名も多数みえる。つまりは、玄宗の開元期の宮廷宴饗音楽が、その後の中国音楽や日本の雅楽に影響したことを物語る資料なのである。

藩邸と太常寺の曲芸競争

『教坊記』の序文には、曲芸の競争の様子が記されている。

凡そ戲をせんとするに輒ち兩朋に分ち、以て優劣を判ずれば、則ち人心は勇を競い、之を「熱戲」と謂う。是に於いて寧王に詔して藩邸の楽を主らしめ以て之に敵さしむ。一伎は百尺の幢を戴き、鼓舞して進む。太常の戴する所は即ち百余尺なり、彼に比せば一たび出づるに、則ち往復す。長さは之を半にせんと欲するに、疾さは仍お兼倍なり。太常の群衆は鼓噪して、其の勝を自負す。

玄宗が皇帝になって間もない開元初期のころ、二手に分かれて優劣を競う「熱戲」と呼ばれるものに人は心奪われた。そこで玄宗は、兄である寧王に藩邸の散楽(王のお抱えの曲芸、この藩邸の散楽には王の時代の玄宗が深く関与していた)をたばねさせて、役所である太常寺の曲芸と勝負させた。結果は、太常寺側の勝利であった。太常寺側の芸人が頭に載せた竿の長さは百尺を越え、藩邸側が片道を行くだけの間に往復する余裕をみせた。まるで竿の長さも倍のように思われ、速さも倍のように感じられる巧みなものであった。太常寺の芸人たちは鼓を打ち鳴らして勝利を喜んだ。百尺は一尺が31.1cmなので、31.1mとは誇張表現かもしれないが、なんともスリルのある芸である。古代から倒立やジャグリングのような曲芸があり、その技術を洗練させることで、文化的な優位を示すとも捉えられてきた。それゆえに、自分が関わってきた藩邸が敗れたことは、若い玄宗には我慢できなかった。すぐに詔を出して、「太常は礼の司にして、宜しく俳優雜技を典るべからず」と、太常寺が散楽に携わることを禁じた、とある。なんと自分勝手な皇帝であろうかと、それを読むものは暗君玄宗のイメージを強くすることになる。

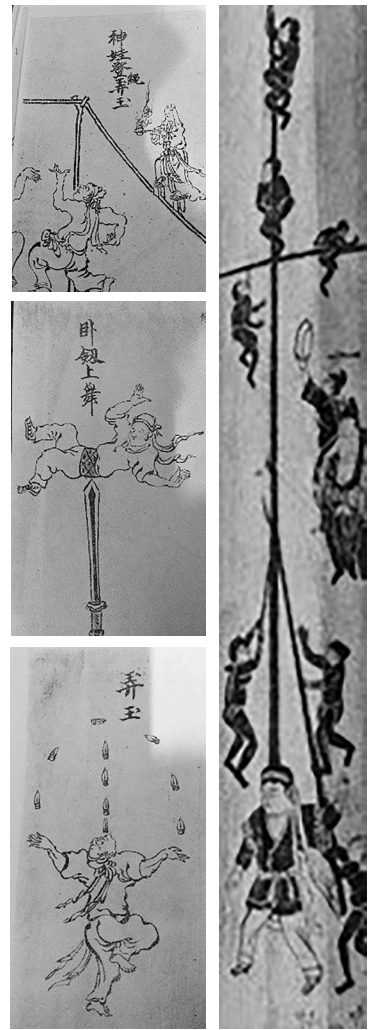
唐代宮中散楽の日本への影響

実際にこうした曲芸は、文化的優位を示す大切な武器であった。

右端の長い図は、正倉院に保管されている遊戯用とされる「墨絵弾弓」162cmの一部分である(『正倉院宝物にみる楽舞・遊戯具』紫紅社、1991年、146頁)。これは竿昇りの軽業であるが、ほかの部分には力自慢や、お手玉の曲芸、楽器の演奏や見物人など総勢96人が描かれている。こうした唐代の曲芸は、必ずや珍重されたに違いない。そのように考えるのは、日本に残された右の三図のような「古楽図」(福島和夫「古楽図」いわゆる「信西古楽図」について)、『説話文学研究』第41号2006年)に詳しい)に「登繩弄玉」や「臥劍上舞」や「弄玉」など曲芸の数々が記されているからでもある。「古楽図」には日本雅楽の元となる「皇帝破陣楽」「蘇合香」「柳花苑」「羅陵王」なども綿密に描かれている。雅楽と曲芸がまるで同列にあるかのような描き方である。玄宗の開元以前は、宮廷の音楽機関である太常寺においてなされていた曲芸を、我が国の使者も見物して大いに楽しんだのではないだろうか。

開元二年の詔の意義

曲芸の勝負を序文に記した『教坊記』は、安史の乱の終息後に書かれているが、このことは注目に値する。同書の最後には、「夫れ廉潔の美を以て之を道う者寡く、驕淫の醜にして之を踏む者衆し、何ゆえなる哉。志意劣り嗜慾強ければなり」といい、後半では女性に耽溺して国を亡ぼした漢の成帝などを引き合いにだし、それゆえに『教坊記』をここに著わすと、その意義が示されている。安史の乱という世の荒廃を招いたのは、玄宗の音楽への偏愛と楊貴妃への耽溺であり、その戒めのために『教坊記』を書いたとの断りが述べられている。皮肉なことながら、『教坊記』に書かれた事柄は、玄宗期の音楽文化の一端を示す貴重な資料となった。なかでも、開元二年に出された詔については、宋代に編まれた歴史書『資治通鑑』巻211にも、「旧制 雅俗の楽は皆太常に隸せしむ。上 音律に精曉し、太常礼楽の司を以て、応に倡優・雜伎を典るべからざらしめ、乃ち更に左右教坊を置いて、俗楽を教えしむ」と明記された。『資治通鑑』がそう記したのは、『教坊記』に基づいているとの見解もある(任半塘箋訂『教坊記』中華書局、6頁)。雅楽と俗楽を「太常寺」と「教坊」にそれぞれ分けた、中国宮廷音楽史上における重大な詔であった。太常寺は礼楽の司であって雑技などの俗な芸能を掌管するのは適切でないとの玄宗の英断から出た詔だったのかもしれないが、『教坊記』序文によって玄宗の一時の腹立ちから出たことと見なされてしまったようである。このように逸話が後世に及ぼす影響は計り知れない。



前回(2026年5月号)で述べたように、ダニエル・パリッシュ・キダーがブラジルで直面した中心的な課題の一つは、識字教育を実施するにあたり、ブラジル政府による黒人の読み書き習得を制限する「読み書き統制」という制度的障壁が存在していたことであった。この障壁は単なる教育政策上の問題にとどまらず、奴隷制のもとで白人と黒人とを本質的に隔てられた存在として固定化する歴史的・社会的権力関係の構造に根ざしていた。そして、この構造を揺るがす契機としての奴隷反乱や民衆反乱、あるいは対抗言説としての奴隷制廃止論のいずれかが不可欠であった。

実際にブラジルでは1835年、北東部バイア州サルバドールにおいて「マレー反乱(Revolta dos Malês)」が発生している。これはイスラム教徒の黒人奴隷(主にヨルバ系)による大規模な武装蜂起であり、約600人が隷従からの解放と信仰の自由を求めて白人支配層に対抗した。しかし、この反乱は密告によって事前に察知されたため、当局によって鎮圧され、多数の死傷者を出す結果となった。この蜂起には読み書き能力を持つ奴隷も参加しており、彼らは書簡などを用いて計画を共有していたとされる。そのためこの出来事は、ブラジル政府が黒人層に対する「読み書き統制」を一層強化する契機の一つとなった。

一方で奴隷制廃止論については、1840年代のブラジルにおいては、イギリス社会で一世を風靡したウィリアム・ウィルバーフォース(William Wilberforce)⁽¹⁾を中心とする反奴隷制運動のような潮流は未だ顕著ではなく、そうした思想運動が本格的に展開されるのは1870年代以降のことであった。すなわち当時のブラジルには、奴隷制そのものを体系的に批判しうる広範な社会的コンセンサスは存在していなかったといえる。

こうしたブラジルの実情を目の当たりにしたキダーは、「読み書き統制」という制度的制約からの脱却の可能性を模索しながら、約3年にわたる観察の結論として、ブラジル社会全体が「苦しんでいる」と評価した。そしてその根本原因を、単なる経済的・制度的問題ではなく、「その広大な領土に見合うだけの自由で知的な人々が欠如していること」にあると結論づけている⁽²⁾。

専門職の不足

まず、キダーが言及する「知的な人々」とは、専門的技術者層を指していた。これは、モノカルチャー・プランテーション経済が発展したヨーロッパ市場向けの換金作物生産の担い手とは異なり、市場革命(交通網の発達・工業化・商業化)の進展と、それに伴う分業体制の構築を担う人々である。彼らの存在によってブラジルは富と力を蓄積し、国家として強大化していくとキダーは考えていた。この点について彼は次のように述べている。

さらに言えば、ブラジルのあらゆる地域において、実務的で勤勉な技術者が十分に不足していることは、最も明白な事実である。このような人々が、出身国を問わず新たに加われば、国内のインフラ整備は大きく進展し、国全体の利益も一層増進されるであろう。(…)しかし、そのような時代が現在の奴隷制度が存続している間に訪れるかどうかは、まったく疑わしい。⁽³⁾

これは別の観点から見れば、ブラジルにおける独立以来の寡頭支配体制からの脱却の必要性や、300年以上にわたる植民地支配に起因する経済的後進性といった課題の克服、さらには奴隷制に依存した一次産品輸出型経済からの構造転換を示唆するものとも解釈できる。また社会的には、「民衆」が政治的主体として登場する共和主義体制の構築の必要性をも示唆しているといえよう。ただし、当時のブラジル社会においてはそのような共通認識は必ずしも形成されておらず、キダーは何よりも奴隷制こそが技術者不足の根本原因であると分析している。

教育の不備

さらにキダーは、教師や教科書、書物の不足についても言及している。すでに2026年2月号で「学校で何も学んでいない少年」を扱ったが、彼は改めて次のように述べている。

すべての州において、有能な教師が著しく不足していることが嘆かれている。(…)さらに、ブラジルにおける教育の進展を妨げるもう一つの重大な障害は、適切な教科書がほとんど全面的に欠如していることである。(…)学校に届いた新聞や書物は、事実上、公共の財産のように扱われ、手から手へと回される。そしてそれは、人間社会の共通の原理に照らして、誰もが何らかの恩恵を期待することのできるものと見なされている。⁽⁴⁾

このように教育環境の不備をキダーは問題視しているが、書物が「公共の財産のように扱われ、手から手へと回される」という状況には一定の背景があった。それらの書物は、識字能力を持つ者によって公共の場で音読されることを前提としていたのである。

実際、19世紀を通じて書物は極めて希少な情報媒体であり、そのため学校内にとどまらず、地域社会において共有される形で利用されることが多かった。その一形態として、「公開読書」という読み聞かせの文化が成立した。「公開読書」は、識字能力の欠如という状況を補完する手段として、多様な社会階層に広く定着していった。それは文学サークルなどでの実践にとどまらず、地方都市の広場などにおいても非公式に行われていた。

キダーはこうした文化の意義を理解していたと考えられるが、同時に彼が構想していたのは、学校における教師による体系的な指導のもとでの教育であったと推測される。なぜなら、「公開読書」ととどまらず、専門的技術者をはじめとする人材育成には、体系的な教育制度の整備が不可欠だからである。

[註]

- (1) ウィリアム・ウィルバーフォースは18世紀末から19世紀初頭にかけて活躍したイギリスの政治家であり、奴隷貿易廃止運動の中心的指導者の1人である。彼はイギリス議会において長年にわたり奴隷貿易の廃止を訴え、1807年に同貿易禁止法の成立に大きく貢献したことで知られる。さらに、その後も奴隷制そのものの廃止を目指す運動に関与し、1833年の奴隷制度廃止法の成立にも重要な役割を果たした。
- (2) Daniel Parish Kidder. *Sketches of Residence and Travels in Brazil: Embracing Historical and Geographical Notices of the Empire and its Several Provinces*. Vol. 2. London: Wiley & Putnam, 1845, p. 388.
- (3) *Ibid.*, pp. 391-392.
- (4) *Ibid.*, pp. 394-395.

金子 昭著『近代日本国家と天理教の時局対応』（法藏館、2025 年）

おやさと研究所教授
金子 昭 Akira Kaneko

今回、自著紹介となることをお許しいただきたい。本書は、天理教教団史の解明であると共に、天理教的歴史哲学の試みでもある。本書が扱う時期は、1908（明治 41）年の一派独立の前後から 1948（昭和 23）年に天理教教典草案が公布された前後までの約 40 年間である。この時期、近代日本における国家及び国家主義に対する緊張に満ちた天理教教団の関わりが見出される。そこでは、政治的・社会的な諸局面である「時局」と天理教独自の歴史観である「時旬」とがダイナミックに交錯しているのである。

「時旬」は「おさしづ」に由来する天理教用語（教語）である。自然の作物に収穫の最適な時期（旬）があるように、出来事にはそれが生起するに相応しい時期がある。この時期は一定の年限、すなわち「時旬」が来た時なのである。この言葉は、信者個人、また教会や教団の一定の年限に敷衍して用いられる。

教団レベルで重要なのは、10 年ごとに巡ってくる教祖の年祭である。とくに戦前の時期、教祖の年祭が時代の局面（時局）と関連して語られる際、世界の動向と親神の思惑との「合図立て合い」になると称される。すなわち、世の中の大きな出来事が一つの「合図」となって、その時に親神の働きが顕現するというのである。だが、「時局」はしばしば思いがけない形で出現し、教団側の「時旬」意識と齟齬をきたすことも少なくない。

しかしながら、天理教はこの齟齬をも親神の深い思惑があると捉え直し、そのつど軌道修正を図りつつ、教団を運営していくことになる。この歴史的過程が天理教の教団史である。そして、そこに見出される「時局」と「時旬」との錯綜した関わりへの自己理解が、天理教教団の歴史認識となっていくのである。

本書では、戦前期の『みちのとも』や『天理時報』などの天理教文献のほか、当時は秘密文書として刊行された『特高月報』や『思想月報』などを精査して、明治末から大正、昭和初期にかけての激動の時代における天理教教団史が検討される。これらの文献に記録された天理教の公的な言説や実動からは、国家主義体制を生きた教団関係者の葛藤や苦悩の姿を読み取ることができるだろう。

以下、本書の概要について述べる。

序章「近代日本の時局と天理教教団」では、まず先行研究及び本書の意義とその構成が祖述される。そして、国民道徳運動（明治末期～）、国民精神作興運動（大正後期～）、国民精神総動員運動（昭和 10 年代～）という三つの国家主義的思想運動と連動した、天理教教団の「時局」への対応及び「時旬」との関連について、その概略が描かれる。

第 1 章「天理教と国民道徳運動」では、教育勅語に由来する国民道徳運動に呼応した天理教の時局対応について詳論される。とくにこの時期における『明治教典』の思想内容、また国民道徳運動との関連で重要な役割を果たした広池千九郎の活動事績の発掘が行われる。

第 2 章「天理教の“大正デモクラシー”」では、第 1 次世界

大戦後に欧米諸国から流入したデモクラシー思想の影響の下、天理教が日本精神を標榜し、国家主義的道徳を維持しつつも、さまざまな社会問題に取り組むようになった軌跡が辿られる。これにより、大正デモクラシーにおける天理教のヒューマンズムの実践の様態が検証される。

第 3 章「治安維持法体制下の天理教」では、天理教が大正末期から昭和初期にかけてどのような時局対応を行ったか、教内の各種の論説や思想について論じられる。昭和一桁の時期までは、天理教は大正以来の国民精神作興運動に乗じて、政府当局と協調姿勢を取ることができた。しかし、日中戦争以降は戦時体制となり、教団に対する締め付けが強化される。1938（昭和 13）年以降、天理教は「革新」体制を取り、国民精神総動員運動の中に呑み込まれていくのである。

第 4 章『『特高月報』『思想月報』に見る天理教』では、戦前期秘密刊行物の『特高月報』（内務省警保局）及び『思想月報』（司法省刑事局）における天理教関係の記事を紹介しながら、天理教が政府当局からいかに監視され、指導を受けていたかについて検証される。

第 5 章「戦時体制から民主体制への大転換期の中の天理教」では、太平洋戦争からその敗北、そして G H Q 支配下に至る約 10 年間を取り上げ、この激動の時代における天理教の時局対応について論述される。1945（昭和 20）年 8 月 15 日を境に日本では大きな政治的な断絶が生じたが、この断絶を跨ぐ形で大きく転換した天理教教団の状況が巨視的に考察される。

結語「時局と〈時旬〉」では、これまで論述してきた内容を振り返り、天理教の時局対応の過程を「時旬」の思想と関連させつつ、天理教の近現代史が歴史哲学的な仕方でも回顧され、総括される。

本書は昨年 2025（令和 7）年 12 月に刊行された。この年は戦後 80 年目の節目の年でもあった。そして本年 1 月 26 日には、天理教は教祖 140 年祭の「時旬」を迎えた。戦後の日本は、民主主義体制の下で平和国家として歩んできた。終戦直後の 1946（昭和 21）年の教祖 60 年祭以降、今日まで教祖の年祭を平和の裡に賑やかに執行してきた。平和な「時局」があってこそ、「時旬」を平和に迎えられる。我々は、激動の時代の天理教教団史を振り返り、そこから学んでこそ、この貴重な歴史的教訓を汲み取ることができるのである。



『近代日本国家と天理教の時局対応』
カバー表紙

2025年度「教学と現代」(2026年3月25日)
『元の理』の学際的研究の可能性を開催

3月25日、おやさと研究所では、天理大学創立100周年企画「元の理」公開教学講座シリーズ『元の理』の学際的研究とその新しい展開を求めての総集編として、2025年度特別講座「教学と現代」を開催した。これまでの1年間、全11回にわたって開催された公開教学講座シリーズでは、各研究員がさまざまな学問的角度から「元の理」の教えにスポットライトを当て、その救済の真理について究明してきた。今回の「教学と現代」は、これらの成果を踏まえて、独自の「元の理」研究を開拓された佐藤孝則元おやさと研究所員をお招きし、『元の理』の学際的研究の可能性というテーマの下、シンポジウム形式で開催した。佐藤孝則氏は現在、大阪動植物海洋専門学校長・まほろば両生類研究所長を務めている。

最初に、佐藤氏より『元の理』の生物学的意義と進化論史的評価」と題した基調講演を頂いた。佐藤氏の講演は、①「元の理」の動物学的考察、②「元の理」の進化論的解釈、③「元の理」の進化論史的評価の3つの部分からなる。

①では、佐藤氏は「元初まりの話」に登場する水棲動物と「十全の守護」との関係性について、生物学的視点から考察した。この部分が「佐藤『元の理』学」の真骨頂というべきところだ。神名を授けられた水棲生物の生態的研究を踏まえ、18種類の「こふき」資料の分析を通じて、なぜそのような「守護の理」が説かれているかについて、佐藤氏は詳しく説明した。とくに、「うを」(男雛型)と「み」(女雛型)がそれぞれヤマトサンショウウオ、スナヤツメのことを指すと推定したのは、佐藤氏ならではの独創的な研究成果であると言える。

②では、佐藤氏は、「元初まりの話」の進化論的解釈について紹介した。生物が進化の過程で、浮力のある水中から大気への重圧に抗う形で陸上へと生活場所を移すのは、両生類の変態の姿である。佐藤氏は、これを、サンショウウオに「しやち」が「男一の道具、骨つぱりの道具」として仕込まれた姿に比定した。また、生物は世代交代を行うことで種を存続させるが、その役割は雌が担っている。カメは脊椎動物の中で唯一、脊椎と肋骨を一体化させる特殊な遺伝子を獲得し、この機能を実に2億2千万年間も受け継いできた。佐藤氏は、これを、ヤツメウナギに「かめ」が「女一の道具、皮つなぎの道具」として仕込まれた姿に比定した。

③では、佐藤氏は、明治初期に広まった国内の「ダーウィン進化論」と「元初まりの話」との関連について、「おふでさき」執筆時期との共時性を考察しながら、「元の理」を日本における進化論史の視点から論じた。ダーウィンの進化論を初めて日本で紹介したのは、明治10年に東京大学で特別講義を行ったエドワード・モースだったとされるが、実はすでに明治6年に来日したドイツ人の古生物学者のフランツ・ヒルゲンドルフであるという説が浮上してきた。一方、明治7年12月に教祖が執筆された「おふでさき」第6号には、「元初まりの話」に関わる進化論的側面の表現が見いだされる。それまで

聞いたこともなかった進化論の基本的な概念が、宗教的視点からとはいえ、すでに「おふでさき」に示されていることは極めて特筆すべきことだと述べて、佐藤氏は講演を結んだ。

次に、佐藤氏の基調講演を受けて、『元の理』の学際的研究の可能性」という総合テーマで、堀内みどり主任の司会の下、パネルディスカッションが行われた。パネリストとして、澤井治郎研究員が「こふきを拵えること—こふき話と『元の理』」という演題で、また中西光一研究員が「進化論と人種主義—『元の理』が示すもう一つの世界観」という演題で、それぞれの専門領域から天理教の教理の新たな解釈を目指して発表した。

澤井研究員は、天理教学の立場から、2代真柱の『こふきの研究』、また佐藤浩司氏や深谷忠政氏の研究成果を踏まえて、「こふき話」と「元の理」について考察。「元の理」は人間的な理解を絶した根本の理合いを表すものであるのに対して、これを目指して人間的な理解が可能で「こふき話」を作る営みが行われた。この「こふきを作る」という営みは、別席台本、『天理教教典』へと引き継がれてきた。澤井研究員は、これを踏まえて、現在もその営みは途上にあるのではないかと論じた。また中西研究員は、社会思想史研究の立場から、「元初まりの話」が説かれた頃、欧米列強では人種間の優劣を正当化する人種主義が浸透した時期でもあったことを指摘。だが、この人種主義は、進化論に対抗して人類多起源説に由来し、いわば偽科学的な内容のものであった。中西研究員は、科学思想史及び宗教思想史の双方から見て、「元初まりの話」が画期的な進化論的意義を示していると論じた。

その後、佐藤氏を交えてのディスカッションとなり、フロアを交えて活発な質疑応答や意見交換が行われた。最後に、井上昭洋所長がこれまでの公開教学講座シリーズを踏まえ、今回のシンポジウム全体についての総括コメントを述べた。

おやさと研究所では、この「教学と現代」の佐藤孝則氏の講演内容を含め、『元の理』の学際的研究とその新しい展開を求めて」と題した1年間にわたる公開教学講座の成果を、「伝道参考シリーズ46」の単行本として、3月26日付で刊行した。
(金子昭記)



佐藤孝則氏の講演

第 386 回研究報告会 (2026 年 4 月 29 日)

「メディアにおける戦争記憶とジェンダー—台湾と日本の公共テレビに描かれた戦争と女性像—」

黄 馨儀 (天理大学国際学部准教授)

本発表は、発表者がこれまで行ってきた朝ドラにおける戦争描写と女性像の研究を土台に、日本の公共テレビの比較対象として台湾の公共テレビのテレビドラマを取り入れ、分析を行ったものである。女性を中心とした朝ドラの戦争描写は、発表者の研究によると、男性が前線、女性が銃後という性別役割分業の図式が提示され、戦況を伝える際に多用されるドキュメンタリー的映像や終戦を表す「玉音放送」、およびヒロインの反戦

または中立的な戦争観が特徴である。台湾の公共テレビ「公視」で放送された戦時下の台湾を描く時代ドラマを分析した結果、朝ドラに描かれた戦争体験と類似した表現や、終戦を意味する「玉音放送」が用いられている点が極めて似ており、男性の出征や女性の銃後の役割も同様の設定であることが明らかになった。台湾と日本のメディアによって作り出された戦争記憶は、日本統治時代という歴史のつながりを物語っている。なお、台湾のメディアに描かれた終戦は、台湾の人々にとって日本統治の終焉を意味し、人々が「光復」を迎えて喜ぶ姿が描かれている。また、戦争を描く際の日本のメディアには女性＝反戦という図式が見られるのに対し、台湾の作品にはそのような図式は見られない。この点が両者の違いであると言える。

2026 年度おやさと研究所 公開教学講座 「布教伝道と伝道学」

第 1 回	4 月 25 日 (土)	伝道学入門—丸川仁夫『伝道学概論』から考える	堀内みどり 主任(終了)
第 2 回	5 月 25 日 (月)	異文化伝道論 1—イスラームの宣教活動に学ぶ	澤井 真 研究員
第 3 回	6 月 25 日 (木)	異文化伝道論 2—コンゴでの伝道とその課題	森 洋明 研究員
第 4 回	7 月 25 日 (土)	異文化伝道論 3—ブラジルから日本へ：在日ブラジル人の布教	中西光一 研究員
第 5 回	9 月 25 日 (金)	伝道史の探究 1—明治時代における教会設置	澤井治郎 研究員
第 6 回	10 月 25 日 (日)	伝道史の探究 2—戦前・戦中の北米伝道	尾上貴行 研究員
第 7 回	11 月 25 日 (水)	伝道史の探究 3—『天理教伝道者に関する調査』を読む	岡田正彦 研究員
第 8 回	12 月 25 日 (金)	伝道学の展開 1—天理大学史の中の「宗教学科」	島田勝巳 研究員
第 9 回	1 月 25 日 (月)	伝道学の展開 2—時代の動きと道の「時句」	金子 昭 研究員
第 10 回	2 月 25 日 (木)	伝道学の展開 3—帝国時代とポスト帝国時代の海外布教戦略	井上昭洋 所長

日時：毎月 25 日 13:00 ~ 15:00

会場：天理大学研究棟 3 階 第 1 会議室

※但し、第 10 回 (2 月) はふるさと会館大ホール (九号棟)

事前申し込みは不要です。
直接会場にお越しください。

グローバル天理
第 27 巻 第 6 号 (通巻 318 号)

2026 年 (令和 8 年) 6 月 1 日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者 井上昭洋
編集発行 天理大学 おやさと研究所
〒 632-8510 奈良県天理市杣之内町 1050
TEL 0743-63-9080
FAX 0743-63-7255
URL <https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html>
E-mail oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

おやさと研究所 (HP)



印刷 天理時報社
Printed in Japan